岩手県北上市立花十三菩提塚

板橋　源・佐々木　博康

I　調査にいたるまでの経過

北上市黒沢尻(くろさわじり)町字立花(たちばな)横町の雑木林高台に十三菩提平(ぼていら)と通称されているところがある。この台地上に十三塚があることは「和賀郡誌」に「十三菩提塚」として記載されているので，岩手県においては著名なものの一つに数えられていた。

ところで、この十三塚の存在している雑木林一帯が農業構造改善施策の一環として林檎園に改められることになったので，その開墾が実施される以前に次記要項により緊急調査をおこなうことになったのである。

記

一，調査の主体

北上市教育委員会（代表者　佐々木修教育長）

二，調査期日

昭和39年7月23日より同28日までの6日間

三，調査地域

地籍	面積	所有者
北上市黒沢尻町立花横町1の41の内1	反・畝・歩 8・6・24	八重樫　正蔵
同1の43の2	1・3・02	桑原　安五郎
同1の43の1	7・08	渡辺　貞夫
同1の41の内6	1・0・13	渡辺　民治
計	11・7・17	

四，調査担当者

岩手大学教授・岩手県文化財専門委員	板橋　源
岩手県文化財専門委員	司東　真雄
北上市市民会館館長	菊池　啓次郎
岩手大学文部技官	佐々木　博康
補助員	
岩手大学板橋研究室所属学生	木村　幸治
同	鎌田　俊英
同	新沼　武秀
同	高橋　武志

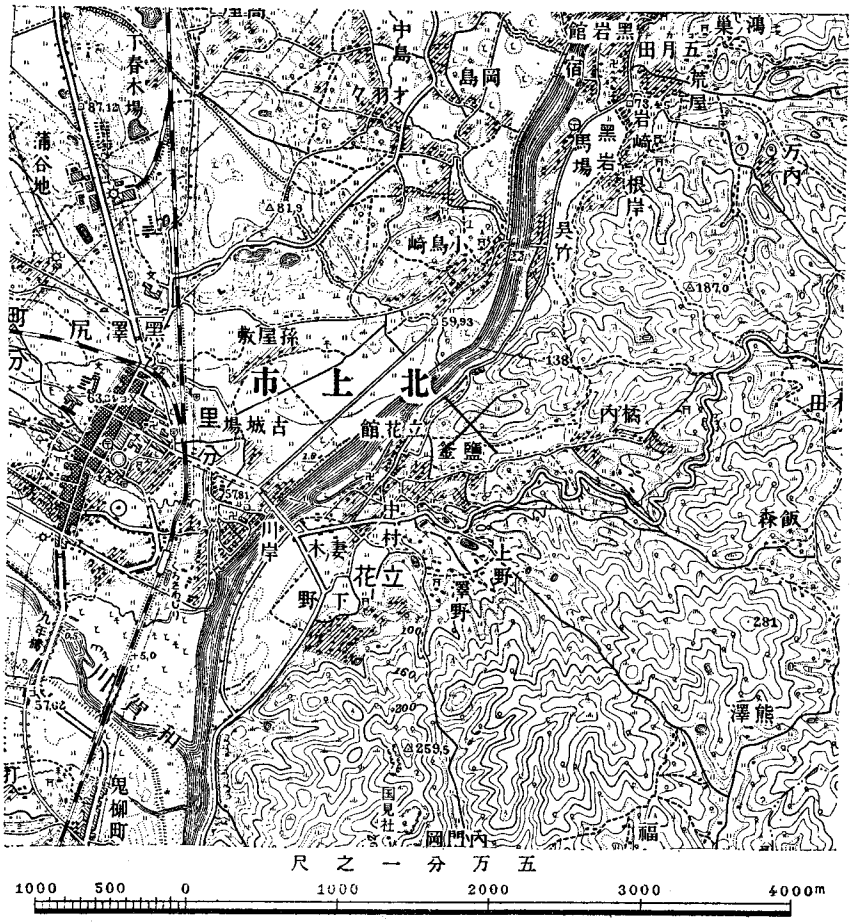
同　　小笠原　文　保
　庶　務
北上市教育委員会社教係長　　滝　沢　義　雄

以上のほかに北上市立図書館の斎藤尚己，研究室卒業生菊池郁雄諸氏の援助をうけた。記して謝意を表す次第である。

II　立　地　情　況

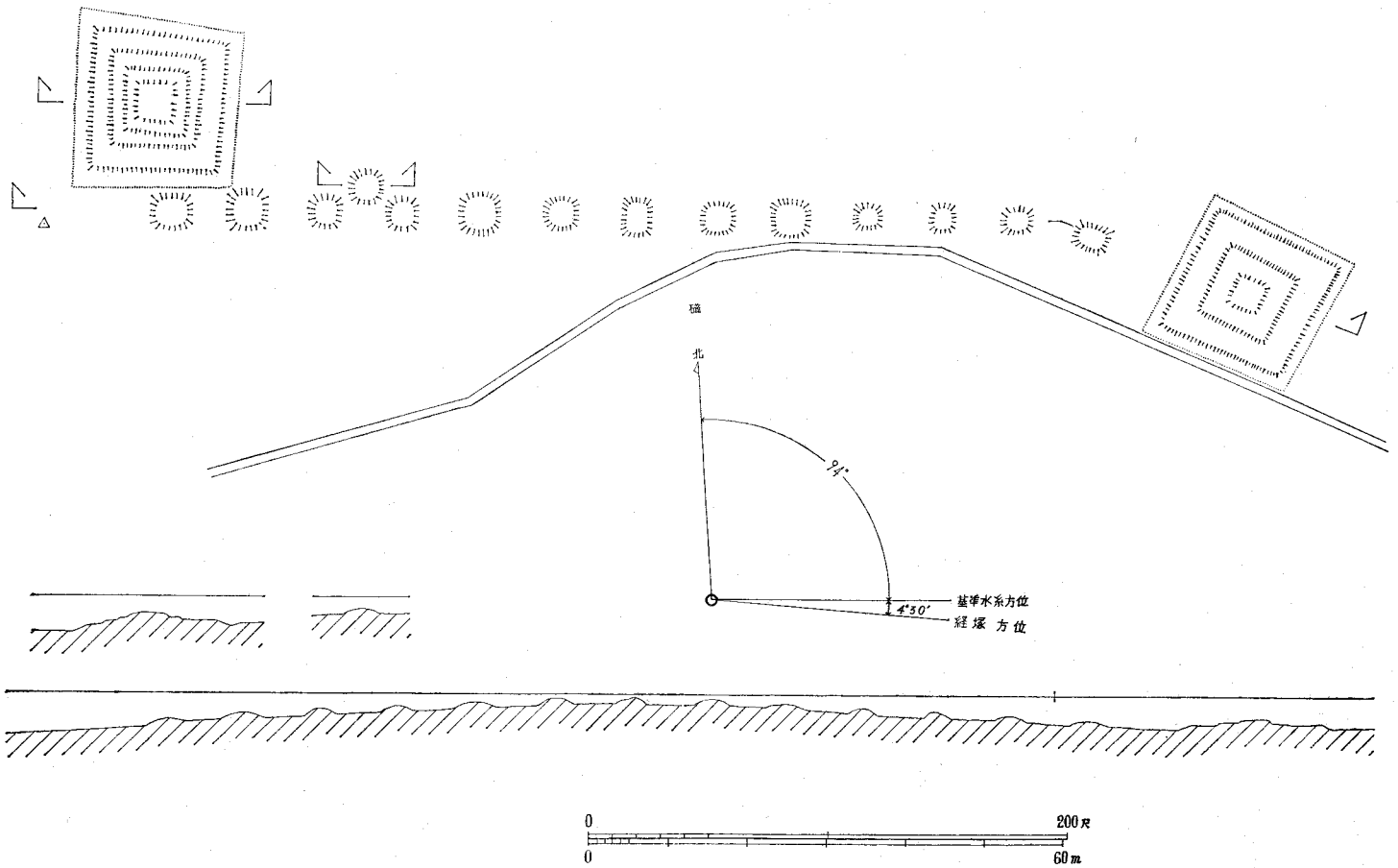
現地は北上市域のほぼ中央を南北に貫流する北上川の東岸に立地する丘陵（海抜約 130m）の突出稜線上にあり，ここに立てば北上市街を一望できる形勝の地である（第１・２図）。

第１図　　立花十三菩提塚位置図



５万分の１地形図，黒沢尻図幅。
図面中央にみえる「北上市」の「北」の文字の右下にある×印が遺跡の位置を示している。

第3図　立花十三菩提塚現状全体実測図



備考　○　基準点

△　山　祠

経塚の位置は図の経塚方位東方延長上，基準点より 197mの距離にある。

現状は長大な松の疎林を混えた一帯の雑木林であるため，調査はまずその伐倒から着手しなければならなかった。そのために2日半をついやした。この2日半は雨であった。

伐倒したところ，東西方向（正確にいえば磁北に対し94° 東偏）の一線に塚13が発見されたのは当然であるが，そのほかにほぼ東西両端において方形重層土壇と，塚列線からやや北にはずれて列外塚1つが今回新しく発見された（第3・4・5図参照）。

これらに，東より数えて東端方形重層土壇（第6図），1号塚，2号塚というように13号塚まで命名し，西端土壇を西端方形重層土壇，塚列からみて北にはずれているものを列外塚とよぶことにした。

東西両端の方形重層土壇は一辺約16mの大壇で，その上にさらに方形の土壇が二重に造成されている。結局，東端のものは3層を，西端のものは4層らしい外観を呈していた。1号から13号までの塚はほぼ同形で，一辺4～5mの隅丸の方形の底面をもち，高さ約1m内外。列外塚だけは円形の外貌を呈していた。

発掘することができたのは，このうち3号，4号，5号，中央7号，9号，13号の6基と，列外塚，西端方形重層土壇とであった。雑木林の伐倒作業に思わぬ時間を消費しなければならなかったからである。

Ⅲ　十三菩提塚の外形と配列

立花十三菩提塚の外形について表示すると（第3図），

第1表　塚列現況形状表

名称		現況底面の広さ 西辺	現況底面の広さ 南辺	形状	高さ
東端方形重層土壇	下壇	15 m 75	16 m 20	方形	1 m 33
	中壇	9 . 50	8 . 30		
	上壇	3 . 80	3 . 20		
第1号塚		3 . 20	4 . 20	隅丸の方形	0 . 43
第2号塚		3 . 00	3 . 80	〃	0 . 60
第3号塚		3 . 60	3 . 00	〃	0 . 69
第4号塚		3 . 20	3 . 60	〃	0 . 58
第5号塚		4 . 50	4 . 60	〃	0 . 52
第6号塚		4 . 00	4 . 20	〃	0 . 73
第7号塚		4 . 60	3 . 80	〃	0 . 88
第8号塚		4 . 00	3 . 80	〃	1 . 06
第9号塚		5 . 00	4 . 80	〃	0 . 96
第10号塚		4 . 00	3 . 60	〃	0 . 93
第11号塚		4 . 00	3 . 60	〃	1 . 04
第12号塚		5 . 00	5 . 00	〃	1 . 07

名称		現況底面の広さ 西辺	現況底面の広さ 南辺	形状	高さ
第13号塚		4 m 40	5 m 20	隅丸の方形	0 m 94
列外塚		径 4 . 10		円形	0 . 61
西端方形重層土壇	下壇	16 . 00	17 . 00	方形	2 . 61
	中壇	10 . 50	10 . 30		
	上壇	6 . 60	7 . 00		

のごとくで，現況形状としては同一でなく，多少の相違はあるが，東西両端の大土壇の基壇はほぼ一辺16m内外の方形底面をもち，両者間にある塚13個は，円形でなく，もともとは一辺4m余の方形に築塚されたものであった。列外塚1個はほぼ円形に近い。この場所は第Ⅰ節おいて既述しておいたように崩壊の災をまぬかれ，原形に近いまま温存されていたので，方形であることが一目判然としたのである。塚頂の高さは，これまた似たりよったりで，1m内外であった。ここで指摘しておきたいことは，

1　13の塚のうちに，特に大きく造立されたものがないということ。13の塚はすべてが同形で，しかも同じぐらいの大いさである。

2　もともとは底面が方形に造られたものであったということ。

3　2号塚から13号塚までの塚頂は一線をなし，東西方向（精しくいえば磁石の東西線よりも4°だけ南にふれている。第Ⅰ節参照）であるのに1号塚だけは東西方向塚列線からやや南にはずれている。こういった奇異な配列になったのは，おそらく，東方方形大土壇との関係からではないか。というのは，ここの十三菩提塚は海抜約130mの丘陵の突出稜線部上にあるために，東西方向に所期の長さをとることができない，そういった地形上の制約をうけた場所にある。地形上からの制約があって，こういう塚列線になったものと考えられる。

4　塚列の配置から，前項のようなことが考えられるということは，十三塚とその東西両端の大土壇とは，深い関連をもつものであり，その造立もほぼ同じ時期であったのではないかとみなされる。

つぎに，東西両端の方形大土壇と十三塚相互の間隔について表示する。厳密な意味では塚の中央頂点を，どこでおさえるかということは必ずしも明らかではないが，ほぼ塚頂かとみなされる点をとって塚頂相互間を計測してみたのが，第2表である。

第2表　塚頂相互間隔表

名称	塚頂相互間隔	名称	塚頂相互間隔
東端方形重層土壇	m	第7号塚	
第1号塚	> 21 . 00	第8号塚	> 10 . 00
第2号塚	> 9 . 80	第9号塚	> 9 . 95
第3号塚	> 9 . 65	第10号塚	> 9 . 60
第4号塚	> 9 . 15	第11号塚	> 9 . 45
第5号塚	> 9 . 80	第12号塚	> 9 . 55
第6号塚	> 9 . 15	第13号塚	> 9 . 65
第7号塚	> 9 . 75	西端方形重層土壇	> 14 . 00

第2表から要約できることは，13個の塚は相互に平均9.60m内外の間隔で設計されているということである。

Ⅳ　塚内部と出土品

日程の制約から発掘できたのは西端方形重層土壇と3号・4号・5号・中央7号・9号・13号の6基と，列外塚1基とであった。その結果を摘記するとつぎのごとくである。

①　3　号　塚（第7図参照）

搬入し積みかさねてある封土は60cmの厚さで，このなかには縄文土器砕片が数片ふくまれていた。この下が厚さ20cm内外の黒色の強い封土層，その下が地山である。塚の南側半分を発掘したかぎりにおいては黒色の土の下部に炭屑が微量ながら撒かれてあった以外は埋蔵品は全く発見されなかった。この遺跡から西北方にあたる丘陵斜面には縄文土器片が出土する。その辺から搬入した土を封土としたのであろう。

②　4　号　塚（第8図参照）

土の層序は前項と同じ。やはり黒色封土の下部において，撒布された微量の炭屑が発見された以外は埋蔵品は全く発見されなかった。

③　5　号　塚（第9・11・12図参照）

土の層序は3号塚に同じである。封土には縄文中期から晩期の破片がかなり多数発見されたほかに，封土頂面から80cm下において炭屑のほかに第11図のごとき短冊形扁平河原石3個（2～4）と基石形をした色沢の美しい扁平河原石3個（5～7）があった。これらは封土とともに無意識に封入されたものとしては，あまりにも形状が特異であるし数も多すぎる。意識的に埋められたものとみるのが至当かもしれない。

④　中央7号塚（第10・11・12図）

十三塚の中央に位置しているので，最初に慎重に発掘したのであったが，層序は前項に同じ。炭屑がみられたことも同じ。ここでは黒色封土の下部において第11図の1のごとき扁平方形の河原石が1個出土しただけであった。

⑤　9　号　塚（第13図）

封土に縄文土器破片と石器砕片があり，黒色封土の下にはやはり炭屑が，調査した塚のうちでは最も多量に発見された。

⑥　13　号　塚（第14図）

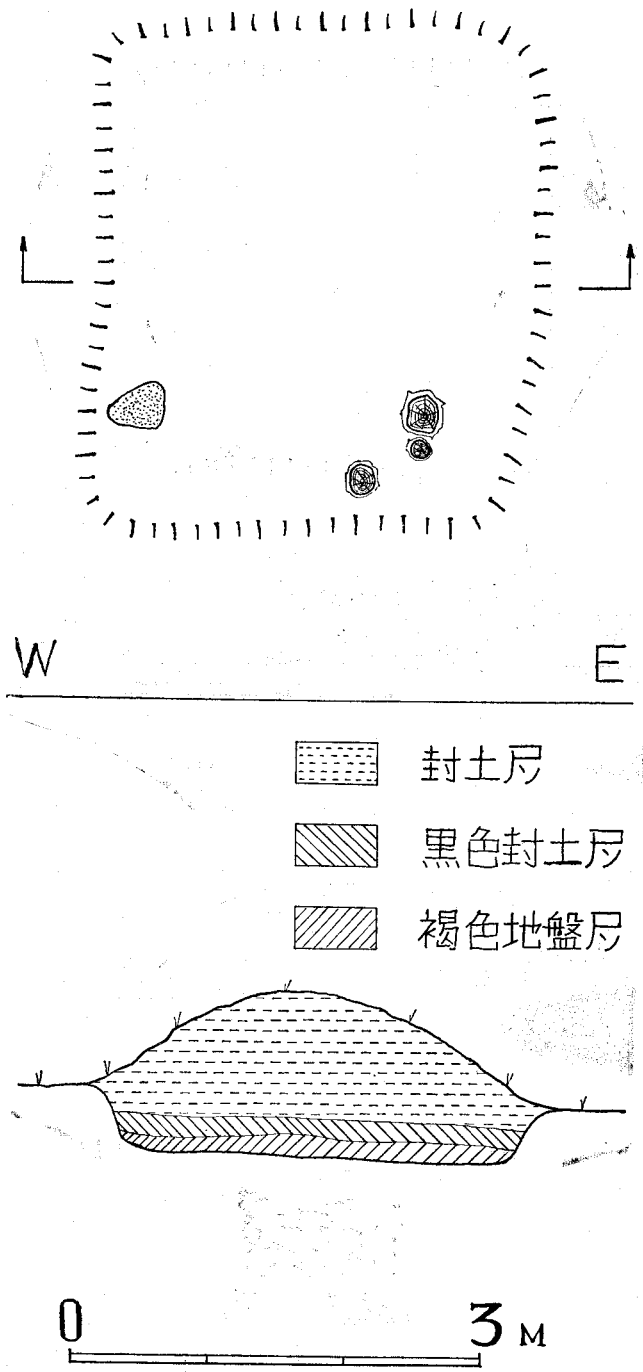
前項に同じ。炭屑がやはりあった。

⑦　西端方形重層土壇（第15・16図参照）

東端方形土壇は明らかに3層をなしている（第1表参照）のに，西端方形土壇は第Ⅰ節において既述したように外観は4層を呈していた。まことに奇異の感を抱かざるをえない。やや詳しくのべると，最下層土壇（西辺16m，南辺17mの方形），そのうえの土壇（西辺 10.50m，南辺10.30mの方形），さらにそのうえの土壇（西辺6.60m，南辺7mの方形），これら3壇は明らかに方形であるが，3壇のうち最上部土壇のほぼ中央にもう一層の土盛があるようにみえた。これは方形（一辺2.70m）のようにもみえるし，円形（この場合は2.70mは直径ということになる）のようでもあった。

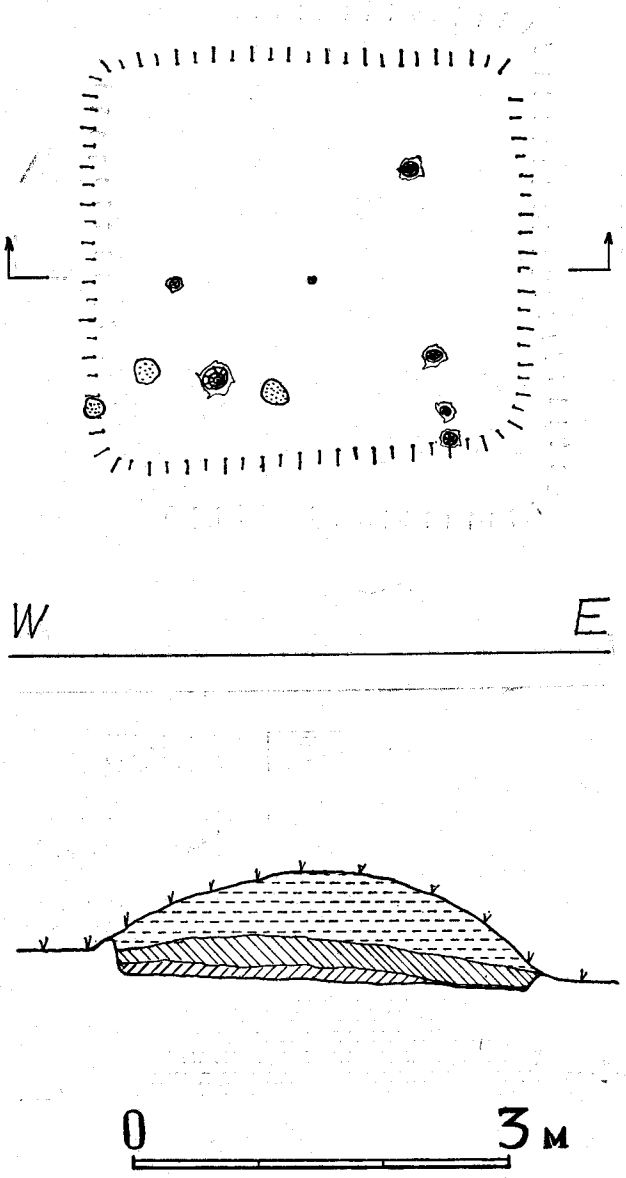
頂面を発掘したところ60cm下に大小の河原石・山石をとりまぜて，とびとびに，ほぼ環状

第7図　第 3 号 塚 実 測 図

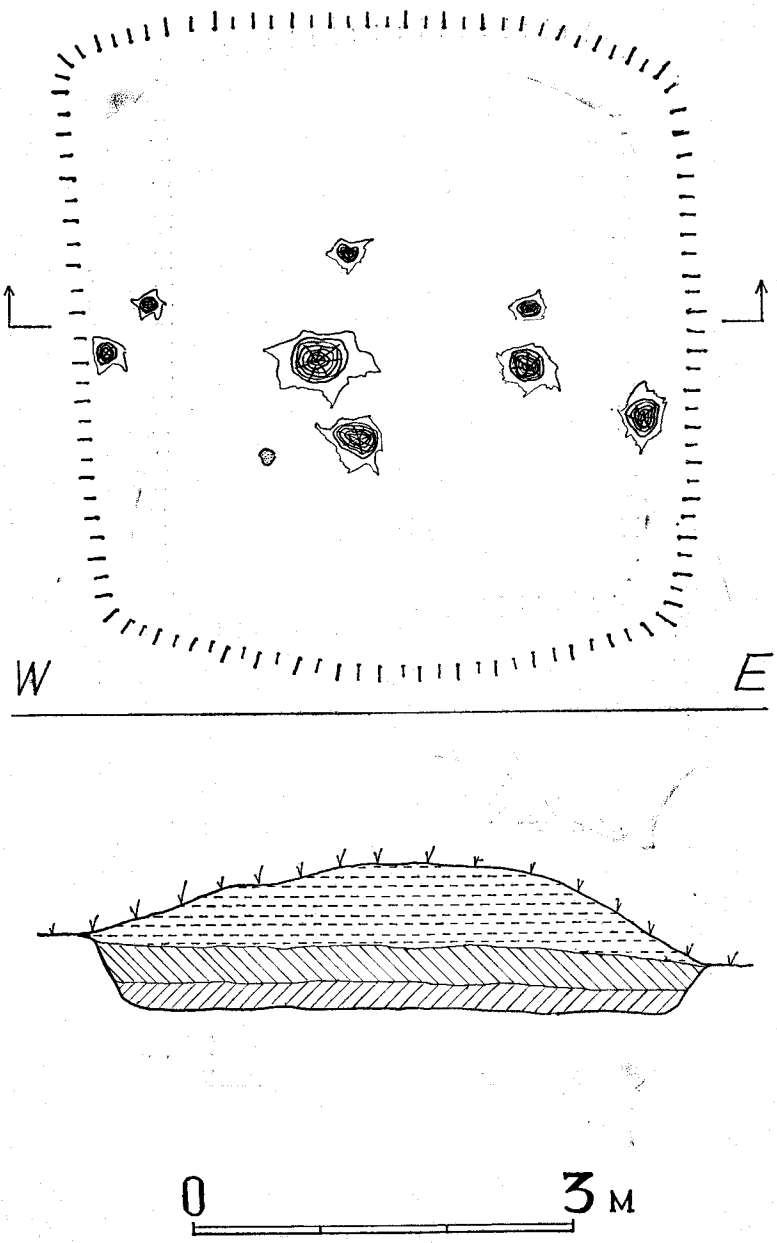


図の水糸線のレベル，方向は第 3 図の現状全体実測図の水糸線と同一レベル，同一方向である。
以下の塚の水糸線も上記と同様。土層の表示もこれまた同じである。

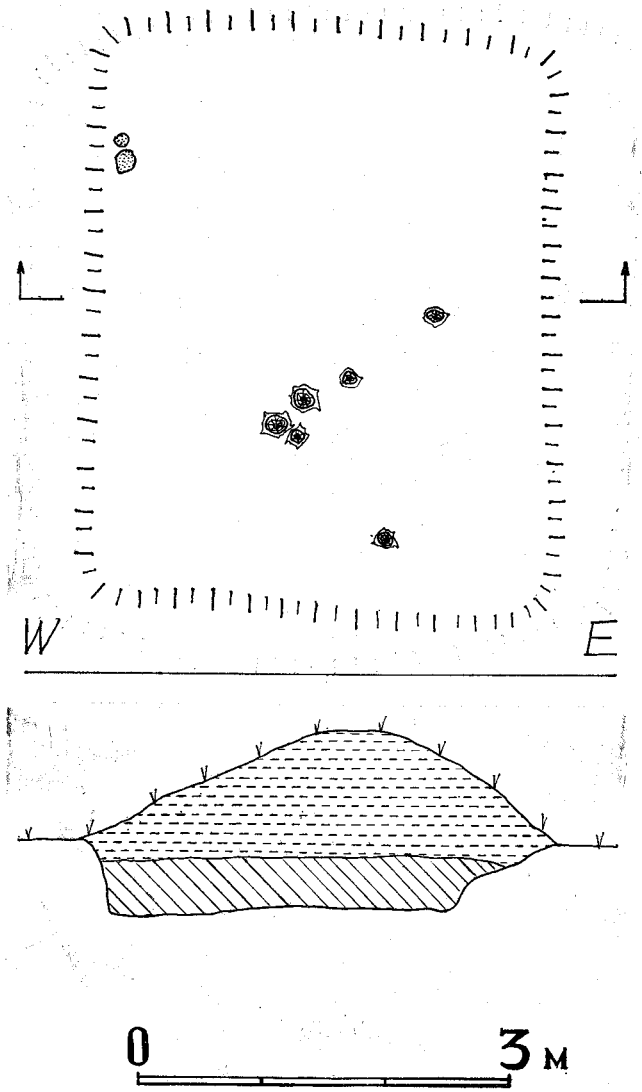
第8図　第 4 号 塚 実 測 図



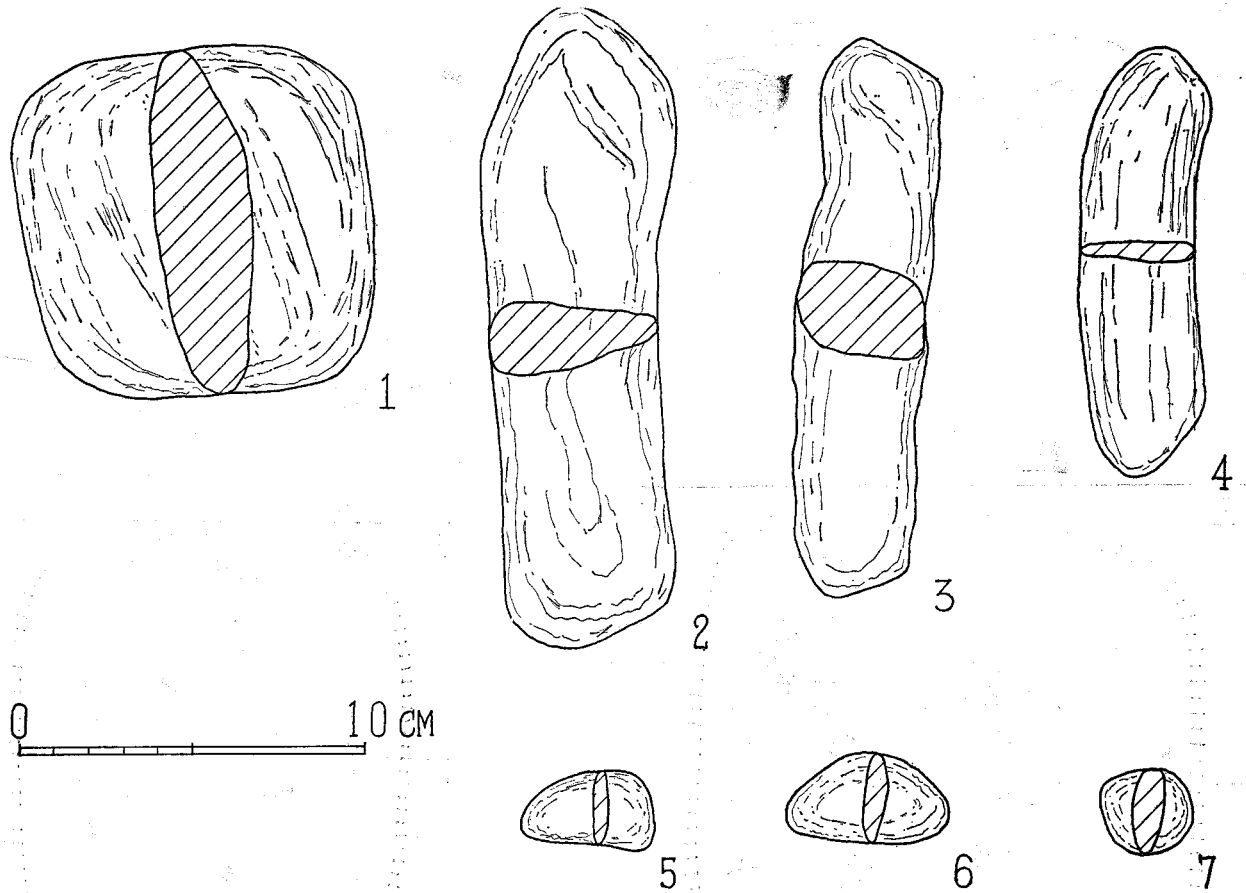
第9図　第 5 号 塚 実 測 図



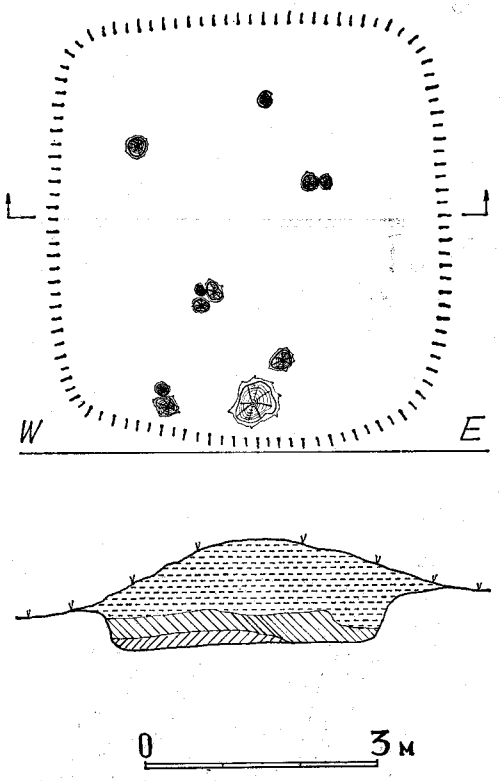
第10図　第 7 号 塚 実 測 図



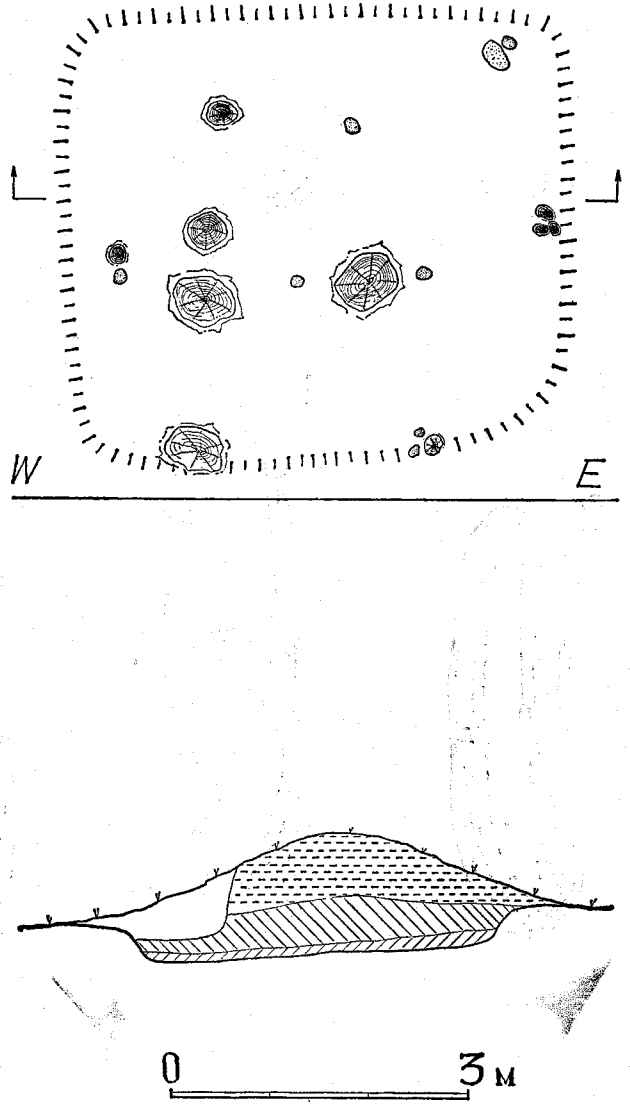
第11図　第５・７号塚封土下部より出土した石の実測図
１は７号塚，２～７は５号塚出土



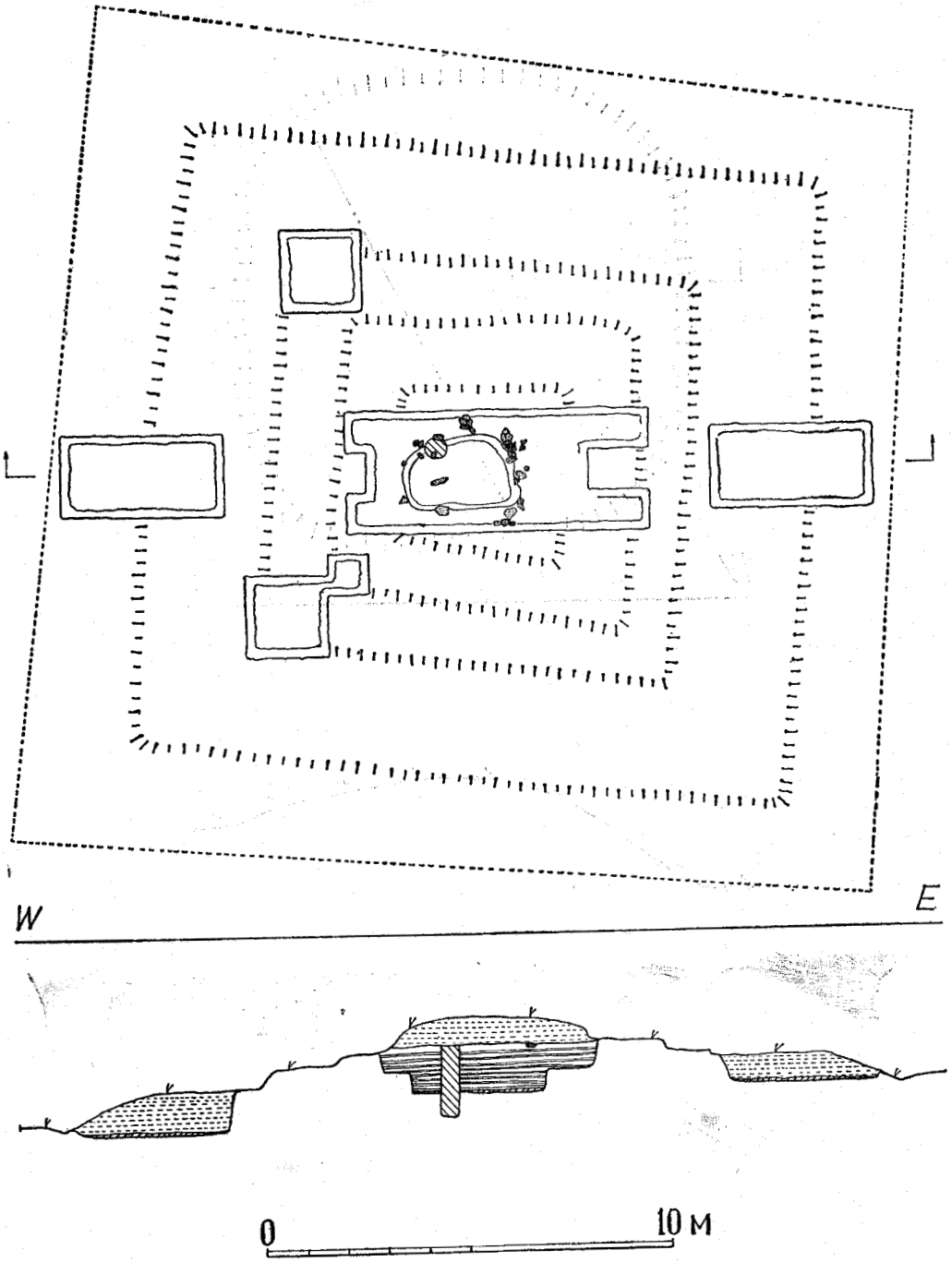
第13図　第 9 号塚実測図



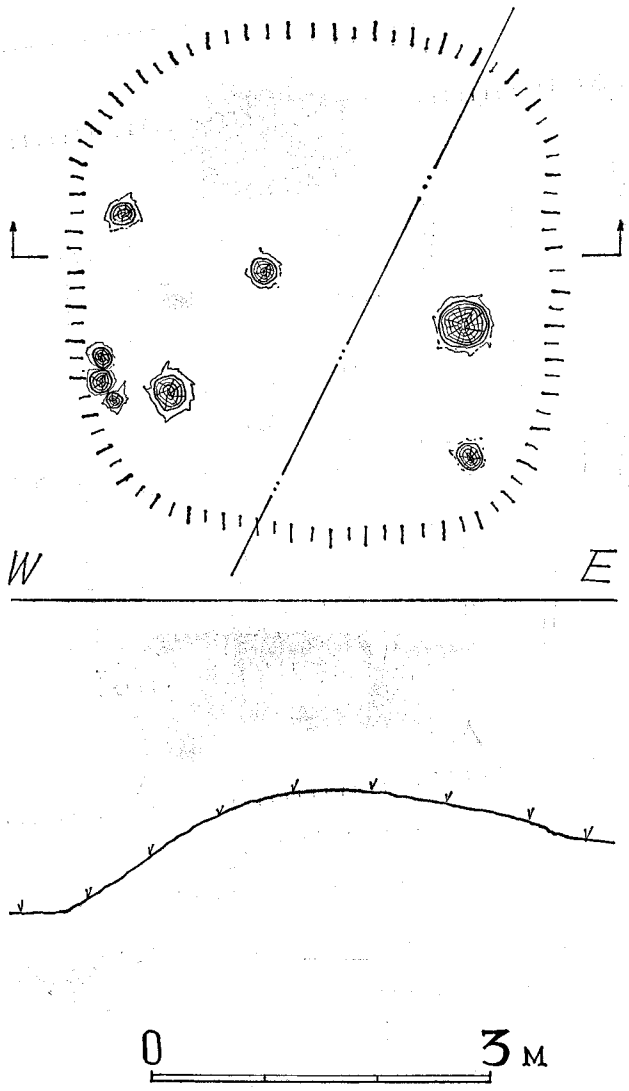
第14図　第 13 号塚実測図



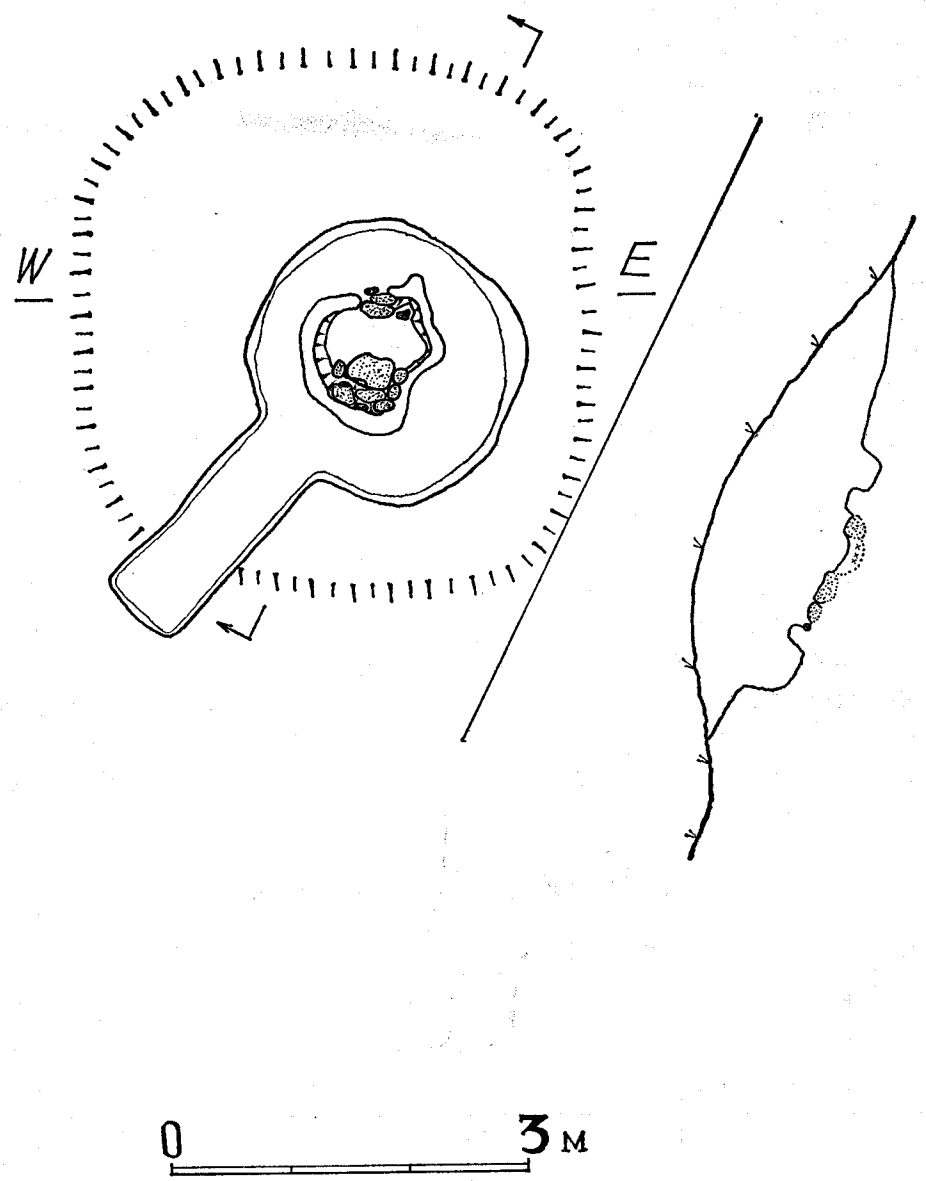
第15図　西端方形重層土壇実測図



第17図　列外塚現状実測図



第18図　列外塚発掘図



(長径東西3.20m，短径南北2.60m)にめぐらした場所があり，この場所で火葬人骨の骨粉が3ヵ所から発見された。3ヵ所は相互に2mほど隔っているので，火葬人骨は1体分とはいいきれない。頂面は何体かの集合埋葬個所であったろう。そこで，この大きい方形重層土壇は当初から埋葬のため造成されたものであったか，どうか。この点を検証するために，さらに1.40m掘りさげて積土の層序をみることにした。結局，頂面より2m掘りさげたことになったのであるが，その結果，頂面より1.85mで地山になった。この西端方形大土壇は第15・16図にあきらかなように地山に達するまで一旦掘りさげ，その上に他所から搬入してきた土を数回にわたって積み重ねて造成したものであること，そして土を積み重ねる際に，この方形土壇のほぼ中央に径40cmの太い柱をまず立てておきそれから土を積み重ねたものであること，この2点が明らかとなった。

さきにのべておいた火葬人骨粉は，この土壇が造成された後に埋葬されたものであった。土壇造成のために積み重ねた土の層序を掘りさげて埋葬されてあったからである。

⑧　列　外　塚（第17・18・19図参照）

高さは13の塚と全く同じであるが外形は，13の塚とちがって円形を呈していた。位置も東西塚列線から北にはずれている。こういった特異な位置からみて，列外塚と命名したのであった。

列外塚の性格を究明するために全面発掘したところ，火葬墳墓であることが判明した。塚頂中央の面より95cm下に大小の礫12個を配置し，そのうえに立棺（寐棺でないことは配礫の端から端までの最大のひろがりが1mしかないので明らかである）をすえ，立棺の下と周囲に薪を積み，この場所において火葬した荼毘所である。この荼毘所にそのまま土を95cmの高さに盛り13の塚とほぼ同形に塚をつくり墓所としたものである。燃え残りの薪木が，配礫の間隙部に並んで残っていたからである。薪木の燃焼熱によって立棺周辺の土が粘土化し，一見粘土槨かと見紛ろうような粘土壁をなしていた。火葬人骨にともなって火熱にあった古銭も6枚あった。

第3表　列外塚荼毘所墳墓出土古銭表（第20図）

番号	銭目	個数	初鋳年代	西紀
1	開元通宝	1	唐高祖武徳4年	621
2	咸平元宝	1	北宋真宗咸平年間	998－1003
3	皇宋通宝	1	〃　仁宗宝元2年	1039
4	熙寧元宝	1	〃　神宗熙寧元年	1068
5	元祐通宝	1	〃　哲宗元祐8年	1093
6	永楽通宝	1	明成祖永楽9年（1説永楽8年）	1411（1説1408）

慎重に探索したが古銭は6枚しか発見できなかつた。これは今日でも当地方に残っている入棺儀礼としての六道銭であろうか。第3表により，この荼毘所墳墓は応永以降のものである。

では，この列外塚荼毘所墳墓と十三塚とは，同時期のものなのか，それとも異った時期なのか，この点を明確にすべき出土品が十三塚からは発見されなかった。

V　考　　察

13の塚をもって一群をなしているので普通に十三塚とよばれているものは，実は各地によっていろいろによばれている。管見にはいったものだけでも，ゆうに50を超える。さらに「ジフソ」とよばれている塚群も十三塚の類であるとするならば80を突破する。

名称が，このように多岐多種であるということは，十三塚はいつ頃，どんな動機で，どのような人たちが，どんなような相談をして築いたのか，ということの非常に複雑なことを意味しているように思われるし，したがって今日こういったいろいろの問題点を考察することのいかに至難であるかということをも予想せしめるのである。おそらく，宗教史全般の立場から，とくにも民間に根強く定着した信仰史，民俗学，考古学など広い専門分野から相互に研究しあって，それぞれの成果をもちよるべきものであろう。

斎藤忠氏が十三塚について

「内部構造は学術調査を経たものが少ないので明らかでないが，供養または奉賽の遺物が存する以外，特殊な施設はないようである。なお十三塚が高塚をなして配列される関係上，今日でもしばしば古墳と誤解され，過去にも同様錯誤されたらしく，十三塚と俗称される中に古墳が含まれることがある。十三塚は歴史時代の民間信仰の土壇として考古学上の対象ともなるものであり，その基本的な調査が要望される。」[1)]

と要約され，その研究の重要性を強調しておられることは，まさに至言である。

十三塚に関する最もまとまった文献は「十三塚考」（昭和23年８月25日発行）である。内容は「諸国に十三境ある事」から「十三塚に就いて考へ合さるべき蒙古の十三鄂博の事」までの16章に，附録「十三塚所在地一覧表」がある。12章までは柳田国男氏，13章以下には堀一郎氏の意見も加わっている。柳田氏の研究「十三塚，上」が「考古学界」８の11に発表されたのは明治43年２月であり，「石神問答」の初版発行は同年５月であった。その後も柳田氏は「十三塚の分布及其伝説」（大正２年１月，考古学雑誌３の５），「境に塚を築く風習」（大正２年５月，郷土研究１の３），「民俗学上に於ける塚の価値」（大正７年７月，中外２の８）等一連の研究論文を，各種の文献を駆使しながら次々と発表しているからまことに永い研究歴といわねばならない。堀氏もその後，「十三塚について」（人文科学論集第１集45～51頁，昭和24年11月）を発表している。

「十三塚考」は博引傍証のすえ，その「結語」において「殆んど結論を提出し得ざる暗中模索の姿を，そのままにさらけ出した一種未完の報告に過ぎない」（同書216頁）と結んでいる。この表現には両氏の学問に対する謙虚な心もこめられているのであって，明確な結論には到達しなかったにもせよ，その論述過程において，蒙古の十三オボをあげるなど数多くの事例を引用し，知りうる限り考案を提示し，検討しながら，多大の示唆を与えている。これから両氏の成果と対比しながら，今回の結果についてのべてみることにする。

十三塚はほとんど全国的に分布し「略ぼ確実と考へられるものは凡そ二百二十三ヶ所，気を附ければまだ新たに有力なるものを補充し得る見込はある」（十三塚考，14頁）。同書は岩手県のものとして６例をあげているが，最近三崎一夫氏は「岩手県の十三塚―北上川中流域の密集地帯を中心に―」（昭和40年10月刊）において，次のように増補しておられる。

番号	所在地	名称	文献
1	東磐井郡藤沢町八沢大字増沢字立石	立石明神社	封内風土記 安永4年風土記御用書出,宮城県史27の409頁 石神問答，定本柳田国男集12の116頁 十三塚考232頁
2	一関市赤荻字堺（山目境）	十三仏田	安永4年風土記御用書出，宮城県史27の90・147頁
3	水沢市黒石字下柳屋敷の上の山(長根境)	十三墓塚 十三坊長根 十三塚	江刺郡誌 341頁 十三塚考45・62・232頁
4	胆沢郡金ケ崎町三ケ尻字十三本塚	十三本塚 十三仏壇 十三塚	安永5年風土記御用書出，宮城県史28の76頁 封内風土記 十三塚の分布及其伝説，定本柳田国男集12の488頁 十三塚考 232頁 日本民俗学，風俗篇 227頁 みちのくの百姓たち 180頁 金ケ崎町三ケ尻十三本塚調査報告，奥羽史談39号 金ケ崎町史327～9頁
5	江刺市岩谷堂餅田字下苗代沢	十三森	安永2年風土記御用書出,宮城県史28の228頁
6	江刺市米里字荒田表	十三墓壇	岩手県の十三塚
7	江刺市玉里字馬馳(マハセ)街道地蔵尊附近	（十三塚）	みちのくの百姓たち 182頁 及川・川崎両氏は玉里には馬馳のほかに大森（土堤内境）・次丸字中野前（角懸境）の二ヵ所にも所在しているように記してあるが，この三者共同一のものである。三地区の地境にある同一個所をそれぞれの地区によって別々の名称，地名でよばれていたことは司東真雄氏の実地踏査により判明した。
8	江刺市広瀬二ノ関字沢（一関境）	十三墓壇	岩手県の十三塚
9	江刺市広瀬歌書字落合（一関境）	十三法壇 十三墓壇	封内風土記 安永2年風土記御用書出.宮城県史28の322頁 石神問答，定本柳田国男集12の150頁 十三塚，定本柳田国男集12の481頁 十三塚考29・33・232頁 江刺郡誌328頁
10	北上市口内町(くちない)柝(は)ノ木田(きた)字飯森(小洞境)	十三墓壇	岩手県の十三塚
11	北上市黒沢尻町立花字横町	十三菩提	和賀郡誌237頁 岩手県史蹟名勝天然記念物調査報告，大正11年度調査第2号（伊能嘉矩報告） 日本民俗学，風俗篇 222頁

番号	所在地	名称	文献
12	遠野市小友字十三坊	十三坊塚	十三塚，定本柳田国男集12の481頁 岩手県史蹟名勝天然記念物調査報告，大正11年度調査第2号（伊能嘉矩報告） 日本民俗学，風俗篇 229頁
13	遠野市附馬牛	十三塚	上閉伊郡誌 268頁 十三塚考 232頁
14	花巻市宮野目	十三森	岩手県史蹟名勝天然記念物調査報告，大正11年度調査第2号（小笠原謙吉報告）
15	二戸郡一戸町小鳥谷	十三本木峠	岩手県の十三塚 5万分の1地図「荒屋」国道4号線の奥中山と小繋の間にある峠の名称
16	久慈市宇部字十三塚	十三塚	九戸郡誌 578頁 十三塚の分布及其伝説，定本柳田国男集12の488頁 十三塚考24・49・233頁
17	北上市二子	十三塚	奥羽史談24号の余白録

十三列塚の名称は各地によって，数十にもおよぶ多様性をもっているということ，そしてほとんど全国にわたって広汎に分布しているのに，どれ一つとしてその発生起源を明確につたえている古文書がないということから，直ちに感じられることは

(1) 「塚そのものの成立も或は古墳の如き長い幅の年代を有したものとは考へられない」(十三塚考119頁）ことである。

(2) 13もの塚を築造するということは容易ならざる土工事業であるから，築造の当初には明らかな動機があった筈である。それなのにその起源が明確でないというのは「正式な文字ある仏教諸宗の管轄外の信仰だったかと思はれ」（十三塚考 130頁）る。とはいうものの，仏教教理と全く無縁であるという意味ではない。「近世迄，この国民の信仰を円頂の徒が干与し得なかった部分と云ふものは極めて稀であり，伝説の指向も亦道仏二教に関係ある事を物語ってゐる」（十三塚考 130頁）からである。

(3) そこで，全国の村々にまで入りこんで十三塚を説いたものとして「僧とも行人とも道士とも見分け難い一個の宗教的修行者」「一派の呪術者の群れ」（十三塚考92頁）が浮んでくる。「十三塚の築造に法師修験，若しくは陰陽師などの徒が干与したらしい痕跡は」「十三塚の種々なる別名の中からも推測せられるが，又伝説そのものの中にも歴然たるものがある」（十三塚考74～75頁）。

形体には「十三の同形の饅頭形列塚も勿論数多く見られるが，少なからぬ数のものが，中の一塚が群を抜いて大き」（十三塚考19頁）いものもあり，高さは1～2m内外であるといわれているが，「饅頭形」という点について一言しておきたい。列塚の基本形は果して「饅頭形」であったのか，「饅頭形」のほかに他の形がなかったかどうかということである。

「十三塚考」の引例には「周径二間位の円塚」(32頁)，「十二の小塚は廻り六間の丸塚」(37頁)，「塚の基径一丈余」(58頁）などとあるので，列塚は饅頭形らしのであるが，柳田氏の旧

稿「十三塚」には武蔵国比企郡西吉見村大字流川の十三塚について「山の上に在り各方七尺余，以上は新篇武蔵風土記稿に見ゆ」[2]とあるので，「方形」のものもあったのである。立花十三菩提においても十三列塚は方形であったし，東西両端の大土壇も方形であった。前述したごとく，幸運にも立花では丘陵頂部の森林のなかにあったので原形がよく保存されていたためである。そこで，考えられることは，天然浸蝕に弱い土を高さ1～2m程度に，そして底面を方形にもったとしても，一辺わずか5～6mにすぎない場合には，永い風雪のうちに裾まわりの外見は円形をを呈するようになるのは当然といわねばならない。今回の発掘例からみても，十三塚一般の基本形は果して造立当初から円形であったのかどうか，躊躇せざるをえなくなったのである。造塚工法からいっても，方形は円形よりも手がこんでいる。そもそもの基本形は円形か方形かという問題について決定的なことをいうためには発掘事例が少ないので暫く措くとしても，円形のほかに，方形のものもかなりあったのではないか。

立地条件は「多くは平地，分は平地沿いの丘陵，川筋などに著るしく偏ってをって，高山又は山嶽地帯に於て反って其例に乏しい」(十三塚考18～19頁)，もっと具体的にいうと「往還の路筋」(十三塚考4頁)，「村はづれの一角や峠の頂」(十三塚考9頁)，郡国や村の「境」(十三塚考43頁以下)に多い。立花の例は，第1図のごとく北上川筋の東岸に近い丘陵の頂部であるから，立地条件上，一般的なケースである。

十三列塚の配列は「一直線上に併立」(十三塚考31頁)するのが通例であって[3]，「然らざるものも一つの様式をなしてゐると云ふよりは地形その他の関係から，自然と曲線を描き，或は飛び飛びに排列されたと見るべきものが多いやうである」(十三塚考34頁)。立花の第1号塚は列塚線から南に多少ずれているのは，あきらかに地形的制約によるものとみなされる(前述)。

ただし，東西両端に方形重層の大土壇がある例は管見のおよぶ範囲では，全国的にみても始めてである。であるから，東西両端の方形重層土壇と13の列塚とは果して同時期に造営されたものなのか，それとも時期的に遅速があるのか，この点，出土品からみて判明できるかどうか，特に注意したのであったが，不明というほかはなかった。しかし，第2図にみるごとく，配列状態からいえば，緊密に一体をなすもののようであるし，外観上の形態からいっても共に方形であるので，同時の造立とみなされるのである。配列状態と外観上の形態，この2点から同時期のものであるとの推定が妥当であるとするならば，前述のごとく立花の十三塚はおそらく初めての調査例であろう。

一直線をなす場合の列塚方位には「別に方位上の規則を守らねばならぬ教理上の義務が始めから無ったのかも知れない」(十三塚考43頁)。東西方向のもの，南北方向のもの，あるいは東北方から西南方に向うものなど，まちまちであるからである。「思ふに，村の地形，往還の位置その他の条件によって，必ずしも一定し難い事情が多かつた為ではなからうか」(十三塚考43頁)。立花の列塚はほぼ東西方向であった。したがって異例ではない。

十三塚が築造された直接の動機は何であったのか。柳田氏はかって，各地の十三塚にまつわる伝承を検討し類型によって

(1)　戦死者の供養塚

(2)　御霊信仰に基く念仏供養塚

(3)　蚩尤伝説による祀塚

(4)　大将塚説

の4に分類し，さらに「十三仏説を批判し，境上神祭の陰陽思想に出でしかの説を述べ，ついで蒙古の十三オボについて鳥居博士の蒙古紀行の説を引き，十三塚が密教教理と関係あるものとせば，それは五壇構への大法等の際に大壇，護摩壇と共に備設せられる障礙除却の十二天と聖天の壇に注目し，これが野祭に於て塚として築かれたのではないかと推定せられた」（十三塚考12頁）。その後，堀一郎氏は研究を深め「十三塚の別名及び伝説に，修験者が浅からぬ関係を有したらしい点，又修験者が特に行法に際して塚を多く利用する点より，修験方面に於て，胎蔵界曼荼羅について重要視すべき法数なる故に，これを先師の指摩に随って一つの仮説として提出する次第である」（十三塚考 193頁）と結ぶにいたった。これが十三塚の性格論の到達点になっている。

そうすれば，立花において十三列塚の東西両端にある方形重層大土壇は，十三列塚とは決して無関係のものではないと考えられる。ことにも西端方形重層土壇のほぼ中央において径40cmの太い柱を立てた痕跡が発見されたことは修法土壇であることの証拠とみなさるべきであろう。

十三塚は，もともと，こういった方形重層土壇をともなうのが，原型であったのか，それとも，あとになってからあらわれた形態なのか，立花の一例だけからでは俄に判断しがたい。

十三塚列の両端に方形大土壇をもつ一例証として，調査の結果をここに紹介して，擱筆する。

註

1）日本考古学協会編「日本考古学辞典」245頁，昭和37年刊。

2）柳田国男著「定本柳田国男集」12の474頁，昭和38年刊。

芦田伊人編「新編武蔵風土記稿」の「巻百九十七，横見郡之二，流川村」に「十三塚村の艮の山上にあり，各方七尺許の塚なり，」とある（10の600頁，昭和32年刊）。

3）列塚の配列は通則として一直線上に併立するというのは，そのとおりであるが，しかし，大小の塚の組合せや直線列塚の組合せかたによって多様な配列構成がありうることになる。両氏は次の8つのタイプをあげている。

1　「十三の同形列塚」

2　「首尾，又は任意の一塚，特に大なるもの」

3　「中央の一塚，特に大なる例」

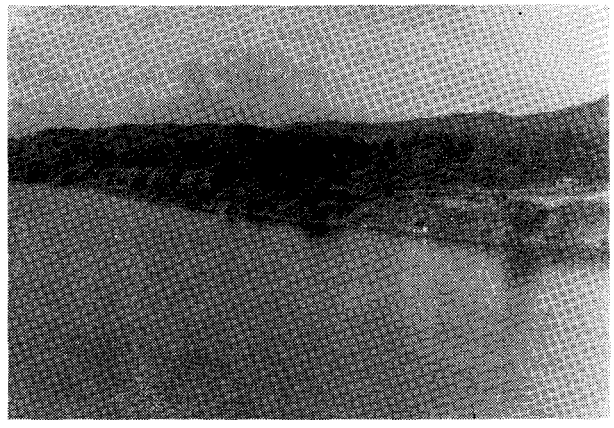
4　「十三の同形列塚を二列に配置するもの」

5　「十三六ツ塚」（十三列塚の中央において，これと直交する列塚を左右に三個ずつ計六個を十字形に配置したもの）

6　「丁字形」（二組の十三列塚を丁字形に組合せ配置したもの）

7　「長塚形式のもの」（基壇を設け，その上に十三列塚を配置したもの）

8　「二十三，三十三の塚の所在を暗示する地名は可なり多いが，その実際の排列がどのやうであったかを確かめる事はもう困難となってしまった」もの



第2図　遺跡望遠写真

北上川に架橋されている朝日橋の西岸部より東北方に望む。遠景の山稜部と近景の河岸段丘の間にある丘陵の写真中央においてやや小高くなっているあたりが遺跡である。手前の川は北上川。

第4図　雑木伐倒後の現状写真（東半部）

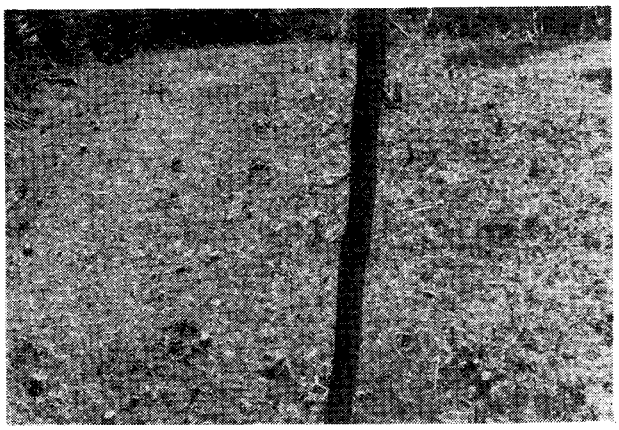
西方より東方に望む。

各々の塚頂にポールを直立させてあるが，そのうち一番手前にみえているポールは7号塚の所在を示し，以下遠景方向に6号，5号，4号，3号，2号，1号と続き，右上方の遠景には東端方形重層土壇の西北部がみえている。

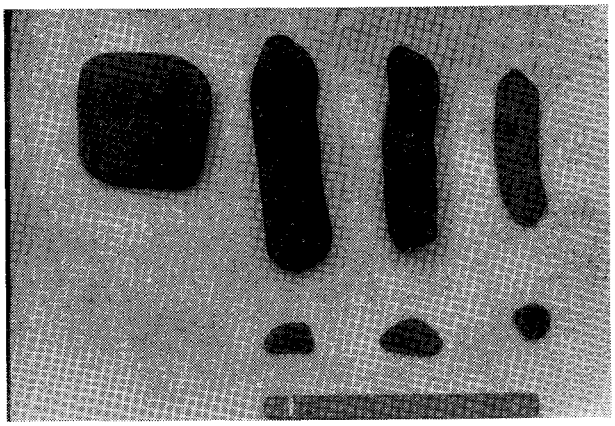
第5図　雑木伐倒後の現場写真（西半部）

東方より西方に望む。（第4図と反対方向）

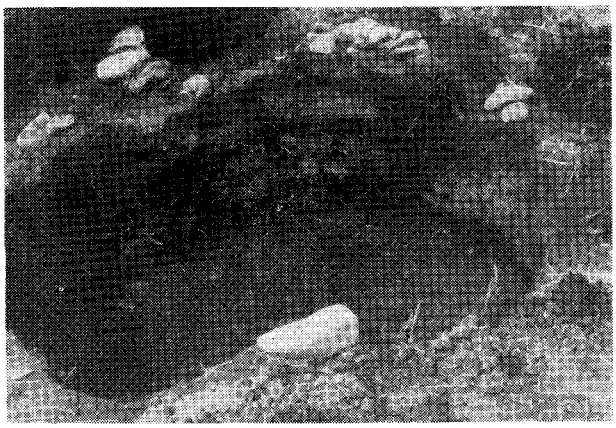
これも各々の塚頂にポールを直立させてあるが，そのうち一番手前にみえるポールは8号塚の所在を示し，以下遠景方向に9号，10号，11号，12号，13号と続き，右上方に列外塚を示すポールがみえ，そのポールの上方の遠景に西端方形重層土壇の東南部がみえている。



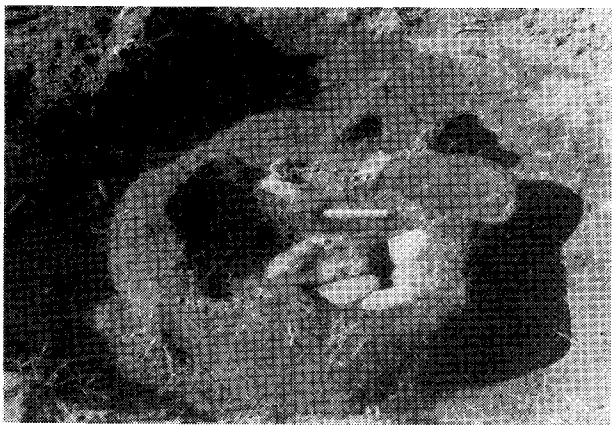
第６図　　雑木伐倒後の東端方形重層土壇。
西方よりみる。



第12図　　第５・７号塚封土下部より出土した石の写真。
左上方の扁平方形の１個は７号塚，右の６個は５号塚出土。スケールはcm。



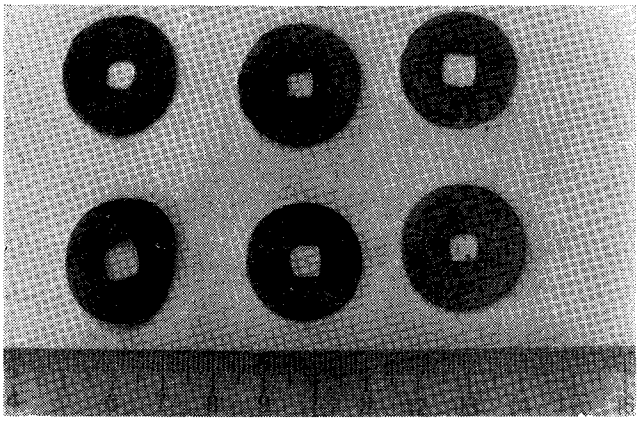
第16図　　西端方形重層土壇の頂部の発掘状況写真。
西南方よりみる。
写真にみえる環状に所在する石は頂面より60cmの深さにあるもので，それよりさらに深く掘ったトレンチはその石の面より１m20ほどの深さで，地山になり，その間は数回にわたって積み重ねられた搬入土が写真では黒（黒褐色土），白（橙褐色土）の互層の断面がみえている。深く掘ったトレンチの左方に黒く柱穴の断面がみえている。



第19図　　列外塚発掘写真

南上方よりみる。

燃焼熱によって粘土化した土と配礫とがみえている。



第20図　　列外塚出土古銭

火熱にあってぼろぼろになっていたり，曲っているものが多い。スケールはcm。